

未分化な意味の分化：

形容詞における主体／客体関係を中心に*

深田智

英知大学

chieft@sapientia.ac.jp

1. はじめに

ことばが意味を持っているのは、私たちがそのことばにまつわる日常経験を意味のあるものとして捉えているからである。¹ 日常経験を介して私たちが獲得する意味世界には、客体に関する知覚や認識、それに伴う運動感覚や身体感覚、感情、などといった様々な側面が混沌未分なかたちで含まれている。このような意味の在り方を、意味を概念化 (conceptualization) あるいは心的経験 (mental experience) の問題として研究を進めてきている Langacker (1988b) は、次のようなことばで述べている。

I understand the term [= conceptualization] in a maximally inclusive way with respect to the domain of mental experience: it subsumes both established concepts and novel conceptions; includes sensory, emotive, and kinesthetic sensations; and extends to our awareness of the physical, social, and linguistic context.

(Langacker 1988b: 49-50)

また、篠原 (2002) は、尼ヶ崎 (1990) の研究を受けて、子供の初期の認知が「主体、客体、活動、対象がすべて未分化の『型』つまり自分と環境とのかかわりあいを認知するということではじまる (篠原 2002: 276)」と述べている。私たちが体験する意味世界というのは、はじめから、主体、客体、活動、状態、などといった様々な側面が渾然一体となった未分な世界だということである。

では、このような意味世界がことばの意味として取り込まれるのはどのようにしてであろうか。岩田 (1988) は、このことを、Werner and Kaplan (1963) の研究に言及しながら、「シエマ」「重ね合わせ」ということばを用いて次のように説明している。

象徴機能の成立とともに、意味ある音声記号としてのことばが誕生してくる。子どもは音声は何かを表す記号であるということに気づいてくる。実は、音声の記号化そのものが、比喩ルという機能を背景にして成立してくるとも考えられる。ことばが、指示対象と重ね合わせられることによって、意味するものと意味されるものの記号的関係として成立してくるのである。しかし、この重ね合わせは、ことばと指示対象の単なる恣意的な結合ではないと思われる。ウェルナーら (Werner and Kaplan (1963)) も、このことを指摘している。指示対象への意味は、対象への感覚、姿勢、感情、心情の諸要素を織り合わせた内的な力動的シエマ活動を通して付与される。この内的シエマ化活動が、ことばというシンボル媒体に浸みわたり、シンボル体にそれと同一の力動的シエマ化が相対的に知覚されるとき、対象とそれを表すことばが有機的に重

ね合わされると言うのである。すなわち、指示対象へと類似した基底シマを共有 (媒介) することによって、重ね合わせとしてのことばによる記号化が成立するのである。

(岩田 1988: 166-67, 筆者下線)

このようなことばと意味世界との関係はどの言語においても共通に見られるものだと考えられる。しかし、中心的なことばに重ね合わせられるシマの部分というものを調べてみると、言語によって違いがあるようである。例えば、Slobin らの移動様態に関する言語表現の研究 (cf. Slobin (2003, 2004), Sugiyama (2000)) では、英語は様態動詞が豊富で、それにさまざまな経路表現をつけるだけで、コンパクトにダイナミックな事態を語れるのに対し、日本語は様態動詞が少なく、それを補うために、ある意味「処理努力のかかる」、例えば、「舞い降りた」のような複合動詞や「さっと舞い降りた」の「さっと」のような擬音語・擬態語を用いて同じ事態を表わそうとすることのだが、そのような手段を用いたところで英語の様態表現の詳細さ、緻密さには到底及ばない、ということが指摘されている。Slobin (2003) は、英語を S-language (Satellite-framed language)、日本語を V-language (Verb-framed language) にそれぞれ分類している。この両者の違いは次の文が示す通りである。

One can say that the semantic space of manner of motion is "highly saturated" in S-language, in comparison with V-language. (Slobin 2003: 163)

このような Slobin らの研究は、英語のような S-language は、意味世界の中でも行為者やその行為に焦点があたりやすく、従って、それに関わるシマ (あるいはシマの一部) をことばの意味に重ね合わせていく傾向があるのに対し、日本語のような V-language はそうではない、ということを示唆しているように思われる。しかし、この研究で考察されているのは、意味世界の中の客体の行為に関わるダイナミックな側面だけあり、そのような側面のことばへの重ね合わせがあまり見られない V-language においては一体どのような側面がことばに重ね合わせられているのかに関する考察はない。前述したように、私たちの体験する意味世界には、客体の行為に関わるダイナミックな側面だけでなく、主体による客体の知覚や認識、あるいは、それに伴う感情といった主体的でスタティックな側面も含まれている。このような側面がそれぞれの言語でどの程度重ね合わせられているかを調べてみたら、英語よりも日本語のほうがそのような側面をことばの意味として取り込む傾向がある、というような違いが見えてくるのかもしれない。²

そこで、本稿では、意味世界の中の主体的側面がことばの意味に取り込まれる程度に関して英語と日本語とで何らかの違いが見られるのかということ、形容詞やそれに類似する言語表現の意味を考察することで明らかにしていきたいと思う。ここで形容詞を取り上げるのは、形容詞の意味には、対象の性質に関わる客体的な側面だけでなく、その対象を知覚・認識するという主体的な側面をも重ね合わせられていると考えられるからである。例えば、川端 (1958) は、形容詞 (あるいは形容詞文) には、対象の状態に関する実質的 (=概念的) 意味と、そのような状態にある対象を指定するという作用の意味 — 認知言語学的に言えば、主体的・主観的な意味となろう — とが融合されていると言っている (cf. 川端 (1958: 3))。また、Langacker (1999) は、形容詞によって表される対象の性質というものが、程度の差こそあれ、主体の、その対象への働きかけを介して獲得されるものであることを述べている (cf. Langacker (1999: 353))。形容詞は、本質的に、客体である対象の性質や状態に関わる側面だけでなく、その対象に働きかけ、それを知覚・認知し、その対象が何であるかを判断していくという主体的側面をもその意味の中に取り込んでいる言語表現だというわけである。

このように、形容詞に主客未分な意味世界が重ね合わせられているとするのなら、英語と日本語における様々な形容詞の意味やその意味拡張あるいは形容詞に類似する言語表現の意味・用法を考察していくことで、主體的側面がどの程度ことばに重ね合わせられているかに関する両言語の違いを見ていくことができると思われる。Slobin らの研究から見えてきた、客體的側面のことばへの重ね合わせの程度だけでなく、この主體的側面の重ね合わせの程度にも違いが見られるというのなら、英語と日本語は、意味世界の中のどのシエマ(あるいは、どのシエマの部分)を中心的にことばに重ね合わせる傾向があるのかという点で異なると言える。混沌未分な意味世界をことばを介して分化していくそのやり方が両言語で異なるということである。

2. 形容詞に関する先行研究とそこから見えてくる日英差

先述したように、英語であれ日本語であれ、形容詞の意味には、対象の性質に関する客體的な側面だけでなく、その対象を知覚・認識するという主體的な側面も重ね合わせられている。形容詞がこのような特徴を持っていることは、例えば、次のような例を見てみるとよく分かる。

- (1) a. 悲しい歌
b. a sad song

「悲しい」も *sad* も、対象である歌の性質を表しているとも、また、その歌に対する主体の認識を表しているとも言える。

以下では、形容詞に関する3つの先行研究を概観し、それを通して見えてくる英語と日本語の形容詞の違いについて述べる。

2.1. 川端による日本語の形容詞文の研究：川端(1958)、川端(1993-95(講義))より

2.1.1. 判断の基本構造に直接対応している文としての形容詞文

川端は、形容詞文を、私たちの判断の基本構造に直接対応している文として分析してきている(cf. 川端(1993-95(講義))). 川端によれば、判断とは、何事かを知ることである。何事かを知るためには、捉えた事柄全体 — 私たちが実際に直接捉えられるのは<もの>ではなく<事柄>全体でしかない(cf. 川端(1993-95(講義))) — の中から実際にはその事柄の中に未分化なものとして存在している直接的な中核を分析していくという心の働き — これを「対象措定」という(cf. 川端(1958)) — が重要になる。このような心の働きを介して、私たちは、それが何であるかを知るというわけであるが、川端の言う判断とは、すなわち、このことである。

そのようにして知られた内容は、「AはBである」という構造を持つと考えられる。川端の言う判断の基本構造とはこのことである。形容詞文とは、「主語+形容詞」という形式をとる文のことであるが、この主語はこの判断の基本構造のAに、形容詞述語はBにそれぞれ対応している。「AはBである」という私たちの判断の基本構造が、そのまま「主語+形容詞」という形容詞文によって表されているというわけである。

2.1.2. 情態形容詞と情意形容詞、そしてその中間的存在である評価形容詞と感覚形容詞

川端(1993-95(講義))は、形容詞というものを、情態形容詞、情意形容詞、評価形容詞、感覚形容詞の4つに分類している。「情態形容詞」とは、「高い」「白い」などのように、<もの>を主語とし、その<もの>の状態を表す形容詞のことである。また、「情意形容詞」とは、「悲しい」「めでたい」などのように、<事柄>あるいは事柄性を含む<もの>を主語にとり、その<事柄>や<もの>に対する一人称者(<私>)

の情意を表す形容詞のことである。この違いを、主体的意味と客体的意味という観点から捉え直してみると、この2つの形容詞は — もちろん、どちらの形容詞も対象の性質に関わる客体的意味（川端のことばで言えば、「実質的（概念的）意味」とその対象を知覚・認識するという主体的意味（川端のことばで言えば、対象を指定するという「作用的意味」とをその意味の中に内包しているのだが — その意味の中心として表しているものが異なるということになる。情態形容詞は、対象を知覚・指定するという主体的側面をその意味の中に取り込んではいないものの、中心的に表しているのは対象の状態という客体的な側面であり、情意形容詞は、対象を主語にとるものの、その意味の中心となっているのはその対象に対する主体の情意という主体的な側面だというわけである。

この両者は、さらに、主体である〈私〉を「私は」というかたちで言語的に顕在化することができるか否かという点でも異なる。(2) に示したように、情態形容詞は、一般に、その意味の中に潜在している対象の知覚者としての〈私〉を言語的に顕在化することはできないが、情意形容詞は、その意味の中に潜在している情意の主体である〈私〉を「私は」というかたちで言語的に顕在化することができる。

- (2) a. *山が私は高い。
b. 逢うことが私はうれしい。³

川端は述べていないが、主体の顕在化に関するこの情態形容詞と情意形容詞の違いは、この2つの形容詞文における、判断の責任者としての〈私〉の役割の大きさの違いからくるものだと思う。一般に、情態形容詞文によって表される事柄（2a）では、山が高いということ）は、〈私〉以外の他者にも同じように知覚・判断される可能性が高い事柄である。つまり、その判断が〈私〉に限定されたものではなく、「〈見え〉の共有（本多 2003: 201）」を介して、おそらく誰にでも同じように判断されるような事柄である。判断主体を言語的に顕在化させるということは、その判断がその主体自身によるものであることを明示的に表すということである。したがって、その判断が〈私〉に限られるものではない情態形容詞文においては、その判断主体を「私は」という語で言語的に顕在化させた（2a）のような文は非文となるのである。一方、情意形容詞文によって表される事柄（2b）では、逢うことがうれしいということ）は、〈私〉以外の他者にも同じように知覚・判断される事柄であるとは言えない。〈私〉以外の他者は、例えば、「逢うことが苦しい」と判断するかもしれないからである。このことは、情意形容詞文においては、その判断が〈私〉に限定されたものである可能性が高いということ、言い換えれば、その判断の責任者としての〈私〉の役割が情態形容詞文の場合よりも大きいということを示していると言える。その結果、情意形容詞文においては、（2b）のように、その判断主体である〈私〉を言語的に顕在化することができるというわけである。情態形容詞と情意形容詞は、客体的側面と主体的側面のどちらを中心に表すのかという点で異なるだけでなく、それぞれの形容詞文における判断の責任者としての〈私〉の役割の大きさも異なるのである。

ところで、深田の観察によれば、少なくとも上代、中古において、情意の主体（これが〈私〉ではなく他者である場合も含めて）を、（2b）のように言語的に顕在化することはほとんどなかったようである。これは、時枝（1973）に挙げられている以下のような例 — これらは、『源氏物語』『枕草子』『古今集』などからの引用例である — を見ても分かる。

- (3) a. 雨降り出でて所狭くもあるに
b. いと恥かしき有様にて対面せむも、いと慎ましく思したり
c. 明け行く空もはしたなく、殿へおはしめ

- d. 御対面の稀にいぶせうのみ思されけるに
 e. 哀れる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、この片端だにかたはらいたし

(時枝 1973)

主体を顕在化させない場合、情意形容詞文は、情態形容詞文と形式的には変わらない。情意形容詞の中には、(4) に示すように、主体の情意だけでなく対象の状態をも表していると解釈できるものが多々あるが、このことと、この情意形容詞文と情態形容詞文の形式的な一致とは関係があると思われる ((4) の情意形容詞は、時枝 (1973) によって、主体の情意と対象の状態の両方を表していると解釈されたものである)。

- (4) a. 祭の頃はをかし
 b. 卯の花 ... 郭公の陰に隠るらむと思ふにいとをかし
 c. 容貌をかしう、心ばせ才ありて
 d. 扇をつと差隠したれば、顔は見えぬ程心許なくて (時枝 1973)

川端の分析に戻って、この情態形容詞と情意形容詞の間にあるものとして挙げられているのは、評価形容詞と感覚形容詞である。まず、評価形容詞であるが、これは、その名の通り、「美しい」「醜い」「よい」「悪い」などといった主体の評価を表す形容詞である。評価には、一般に、個人的な差がつきものであるから、その意味で、この形容詞は本質的に情意的であると言える。また、(5) に示すように、この形容詞が表す評価の対象は〈もの〉でも〈事柄〉でもよいのだが、この点でも、評価形容詞は情意形容詞に近いと言える。

- (5) a. その本はよい。
 b. 君が笑うことはよい。

しかし、(6) に示すように、この形容詞は、その評価の主体である〈私〉を言語的に顕在化することはできない。これは情態形容詞と同じ特徴である。

- (6) a. 花が美しい。
 b. *花が私は美しい。

したがって、川端は、評価形容詞を、情意形容詞的でありながら情態形容詞に近づいている形容詞であるとしている。

一方、感覚形容詞は、〈もの〉を主語にとる形容詞であるから、基本的に、情態形容詞に近い形容詞であると言える。しかし、(7) に示したように、その感覚主体である〈私〉を言語的に顕在化することができるという点では、情意形容詞的でもある。

- (7) {棘が/指が/傷が}私は痛い。⁴

そこで、川端は、感覚形容詞を、本来情態形容詞的でありながら情意形容詞に近づいている形容詞であるとしている。

川端の分類した4つの形容詞の関係は、以下のように図示できる。

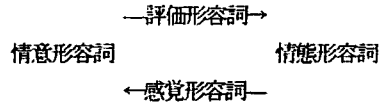


図1 川端による4つの形容詞の相互関係

2.1.3. 客体への主体の情意の投影

2.1.2. でも述べたように、情意形容詞の情意の主体は基本的には一人称者 (<私>) である。しかし、川端も述べているように、情意を持つ (有情の) 対象 (客体) が主語にきた場合には、その対象がその情意の主体であると解釈される。次の例を見てみよう。

- (8) a. 子供たちはたのしく一日を過ごした。
 b. 小鳥はさみしく飛び去った。

これが<私>ではなく主語で表された対象の情意を表していることは、例えば、次のように情意を持たない対象が主語になっている場合 — 川端はこのような例を「<私>の感情移入」の例と呼んでいる (cf. 川端 (1993-93 (講義))) — と比較してみるとよく分かる。

- (9) 草花は寂しく咲いていた。

この場合の「寂しく」の情意の主体は<私>である。

そこで、川端は、(8) を「情意形容詞の情態形容詞化」の例として説明している。これは、(8) の情意形容詞が、対象の状態を客観的に表す「たのしみに」あるいは「さみしそうに」という言語表現と意味的に非常に近いものとなっているということからも理解できるのだが、しかし、だからと言って、もとの情意の意味が完全に失われて客体の状態に関する意味のみを表すようになったというわけではない。情意の主体が<私>ではなく対象 (客体) に変わったという意味での情意形容詞の情態形容詞化であり、また、情意を心理「状態」と解釈し直すならば、<私>の情意から対象の心理「状態」への変化という意味での情意形容詞の情態形容詞化である。また、(8) のような例は、「もし自分がその対象であったなら...」という主体の推論を介して解釈された対象の情意 (心理状態) を表す文であるとも言える。本多 (2003) のことばを借りて言い直せば、「<見え>の共有」と「身体の同期」を介して主体によって解釈された対象の情意 (心理状態) を表している文であると言うことになるのだが、その意味でも、もとの<私>の情意の意味が完全に失われたとは言えない。

このような例は何も現代語に限ったものではない。時枝 (1973) の分析の中に見られる次のような例も、情意形容詞の情態形容詞化の例であると言える。「侘びしう」という情意の主体は「宮」であって<私>ではないからである。

- (10) 御物怪にやと、世の人も聞え騒ぐを、宮いと侘びしう (時枝 1973: 224)

2.2. 時枝 (1973) : 情意的意味と状態的意味、主体と対象

時枝 (1973) は、日本語の形容詞には、対象所属の状態性意味を表すもの、情意の主体 — 時枝 (1973) においては、川端の言う「有情の対象」も、それがその情意の主体であれば、「情意の主体」として分析されている — 所属の情意性意味を表すもの、そしてその両方を表すもの、の3つがあると言っている (cf. 時枝 (1973: 217))。

[対象所属の状態性意味を表すもの] 高い、低い、赤い、深い、太い

[状態性、情意性のどちらの意味も持つもの] にくらしい、面白い、をかしい、寂しい、暑い、恐ろしい

[情意の主体に所属の情意性意味を表すもの] 恋しい、ほしい、望ましい、恥かしい

時枝の分析によれば、本来情意的意味を表していた形容詞が状態的意味をも表すようになることはあっても、その逆はないようである。したがって、状態性意味と情意性意味の両方を持つ形容詞というのは、状態的意味をも表せるようになった情意形容詞であると言える。次の例を見てみよう。

(11)a 秋の夕暮れは寂しい。 / 歓楽の後は寂しい。

b. この模様は寂しい。 / 今年の祭りは寂しい。

時枝によれば、(11a) の「寂しい」は、情意的意味のみを表している「寂しい」の例であり、(11b) の「寂しい」は、情意的意味よりも、そこから推論される客体の状態に関する意味を中心として表している「寂しい」の例である。注意しておくが、時枝も指摘しているように、(11b) は、状態的意味への移行がかなり進んではいるものの、もとの情意的意味を完全に失ってしまっているわけではない。このことは、例えば、「この模様はクリスマスカードにしては寂しい」(大谷, p.c.) や「今年の祭は、あの祭好きの父が死んでしまったこともあって、私には寂しい」(中野, p.c.) のように、個別性、一時性、限定性を高めるようなことを補うともとの情意的意味が顕在化してくるということからも明らかである。

この時枝の解釈に従えば、(11a) のほうが (11b) よりも主体の情意の意味が強い、言い換えれば、(11a) のほうが (11b) よりも主観性が高いということになるのだが、解釈によっては、後者のほうが前者よりも主観性が高いと考えられる場合もある(富永, p.c.)。例えば、主語名詞句に注目した場合、(11a) は「秋の夕暮れ」一般、「歓楽の後」一般について語っている総称文と解釈できるのに対し、(11b) は「この」「今年の」ということばからも分かるように、個別的、一時的、限定的な事態を語っている文であると解釈できる。総称文であるということは、その文が「観察点の公共性」(cf. 本多 (2002, 2003)) を介して発せられた対象の属性記述文であるということ、また、個別的、一時的、限定的な事態を語る文であるということは、その公共性が低い、すなわち、〈私〉個人の情意を表す文であるということとそれぞれ示している。この解釈に基づけば、(11b) のほうが (11a) よりも主観性が高いということになる。状態性意味と情意性意味の両方の意味を持つ形容詞においては、そのどちらの意味が顕在化してくるかは文脈や状況で異なるというわけである。

いずれにせよ、本来情意的意味を表していた形容詞の中には、その意味を拡張させて状態的意味をも表せるようになったものがある、ということになるのだが、時枝によれば、このような形容詞の存在こそ、古典における形容詞の解釈を難しくさせている要因の1つだということである。例えば、「恥かし」は、(12) のように、本来主体の情意を表す形容詞であるが、(13) では、主体の情意を表しているとも、また、対象であ

る「人」や「御有様」の状態を表しているとも解釈できる。

(12) いと恥かしき有様 (河内本により改む) にて対面せむも、いと慎ましく思したり (時枝 1973: 221)

(13) a. 斯く恥かしき人参り給ふを、御心遣ひして、見え奉らせ給へ

b. いと恥かしき御有様に、便なき事聞召しつけられじと (時枝 1973: 221)

(13) において、主体の情意を表しているとは解釈した場合には、「私が恥かしく思ひ申上げて居る」の意味になるし、対象の状態を表しているとは解釈した場合には、「立派な端麗な」の意味になる (cf. 時枝 (1973: 221))。この他、「所狭し」「をかし」「心許なし」「あじきなし」「あいなし」なども、時枝によって、主体の情意だけでなく対象の状態に関する意味をも表すことのできる形容詞として分析されているものである。

また、古典においては、形容詞の形容の対象が言語的に顕在化しない場合もあるのだが、これも古典における形容詞の解釈を難しくさせている要因の1つのようなのである。次の例を見てみよう。

(14) 明け行く空もはしたなくて、殿へおはしぬ (時枝 1973: 223)

(14) において、「はしたない」のは、「明け行く空」ではなく、「明け行く空によって、人に見られるとか、我身の姿が露になるとか」といった様々な事柄である (cf. 時枝 (1973: 223-24))。このような事柄が「中間に思惟として介在して居るにも拘はらず、話者の意識としては、単に明け行く空とはしたなしといふ感情の対応が意識の焦点に現れた事を意味 (ibid.)」しているのが (14) なのである。

では、次の「をかし」はどうだろうか。

(15) 祭の頃はをかし (時枝 1973: 225)

この例で、「をかし」と形容されている対象は、「祭の頃」ではない。時枝は、祭の頃の個々の事柄を経験していく中で立ち現れてきた特殊な心の働きを反省する意識の中に、「をかし」という感情が生まれてくるのではないかと述べている (cf. 時枝 (1973: 225))。この解釈によれば、この「をかし」の対象は、祭の頃の個々の「事柄の中に存在し、作用する仕方又は或対象に志向する心の働きそれ自体 (ibid.)」ということになる。

(14)や (15) のような用法は、対象の「属性を意味するといふよりも、対象を機縁として、それに就いて更に想像思惟が起り、その上に構成される主観の情意を表はして居る (ibid.)」用法である。このような用法の存在は、日本語の情意形容詞が、主体の情意を中心として表してはいるものの、そのような情意を抱くに至るまでのさまざまな<事柄>やその事柄の中に存在する<もの> — その中には、主体に関わるものだけでなく、客体 (対象) に関わるものも含まれる — を未分化なかたちで取り込んでいるということ、言い換えれば、そのような情意の経験にまつわる様々な側面を未分化な状態でその意味の中に取り込んでいることを示していると言える。

(14) や (15) のような情意形容詞の例だけでなく、次のような現代日本語の例も、私たちの体験する意味世界の中の主体的側面と客体的側面とが未分化なかたちで重ね合わせられている言語表現の例である。

(16) a. 彼はなんでもない事でも面白く話します。

b. 雨が寂しく降っている。

c. すばやいすぎ 皮脂汚れまでスッキリ (「おふろのルック」の宣伝文句より)

(16a)の「面白く」は、主体である〈私〉の情意を表している (cf 「私は (彼の話聞いて) 面白い (と感じる)」 「私は面白く彼の話聞く」) とも、対象である「彼」の性質を表している (cf 「(なんでもない事でも面白く話す) 彼が面白い」) とも、また、「なんでもない事」の状態を表している (cf 「なんでもない事が (彼が話す) (私には) 面白い」) とも解釈できる。また、(16b)の「寂しく」は、主体である〈私〉の情意を表している (cf 「私は (雨が降っている) 寂しい」) とも、また、対象である「雨」の状態を表している (cf 「(降っている) 雨 (のその振り方) が寂しい」) とも解釈できるし、(16c)の「スッキリ」も、主体である〈私〉の情意を表している (cf 「私は (風呂を洗って) スッキリだ」) とも、また、対象である「風呂」の状態を表している (cf 「風呂が (きれいに洗われて) スッキリする」) とも解釈できる。(16)で下線を引いた語句は、すべて、上述の「恥かし」「をかし」同様、主客未分な混沌とした意味世界を表していると言える。

2.3. 篠原 (2002): 日本語の形容詞論から英語の形容詞論へ

篠原 (2002) は、川端 (1983) と尾上 (1997) の日本語の形容詞についての分析とその分類をもとに、英語の形容詞を次の7つのタイプに分類している。

(17) <典型的形態形容詞文>

- TYPE 1 属性の持ち主 (対象) —属性 This flower is red.
 TYPE 2 属性の持ち主 (対象) —属性 (評価) She is pretty (to look at).
 TYPE 3 属性の持ち主 (対象) —属性 (評価) This book is easy (to read).
 行為—属性 (評価) It is difficult to convince him.
 TYPE 3' ことがら—属性 (評価) This project is possible.
 TYPE 4 属性の持ち主—属性 He is stupid (to do so).
 行為—属性 (評価) It is honest of him to do so.

<温度の形容詞文>

- TYPE 5 場所—温度 London is cold.
 対象—温度 This ice is cold.
 主者—温度 I am cold.
 身体部分—温度 My hands are cold.

<情意形容詞文>

- TYPE 6 情意の機縁 (対象、ことがら) —情意 That story is sad (to listen to).
 It is sad to know the fact.
 情意の主者—情意 I was sad.
 TYPE 7 情意の主者—情意 I am happy. (篠原 2002: 264-65)

TYPE 1 は川端の分類における形態形容詞に、TYPE 2, TYPE 3, TYPE 4 は評価形容詞に、TYPE 5 は感覚形容詞に、TYPE 6 と TYPE 7 は情意形容詞に、それぞれ相当すると思われる。興味深いのは、篠原が、川端と同じように、それぞれの形容詞がその主語に何をとり、言い換えれば、それぞれの形容詞が表す事柄の中核として分析されるのは何であるか、という点に注目して英語の形容詞を分類しているだけでなく、10

不定詞を後続させられるか否か、言い換えれば、ENTITY (存在物、篠原の分析ではこれは主体であってもいい「本」のような対象であってもいい) だけでなく、PROCESS (主体がその対象を理解するためにその対象に対して行った行為、あるいは、主体にそのように知覚される原因となった対象の行為) をも分化して表すことができるか否かということにも注目して分類を行っている点である。篠原が挙げている英語の形容詞に見られる PROCESS と ENTITY の分化に関するスケールとは次のようなものである。

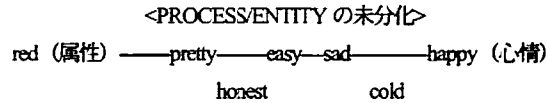


図2 篠原 (篠原 (2002: 280); 一部変更) における英語の形容詞に見られる PROCESS/ENTITY の未分化・分化

このスケールの一方の極にあるのは、対象の属性を表す *red* のような TYPE 1 の形容詞である。この形容詞は、その中核として対象をとり、それを主語で表す。ENTITY を分化しそれを言語的に顕在化させる形容詞なのである。もう一方の極に置かれているのは、主体の情意を表す *happy* などの TYPE 7 の形容詞である。このタイプの形容詞は、*I am happy!* の例からも分かるように、その情意の主体である<私>を主語としてとる形容詞である。このタイプの形容詞は情意の主体という ENTITY を分化しそれを言語的に顕在化させる形容詞なのである。

pretty などの TYPE 2 の形容詞が言語的に顕在化させるのは、たいていの場合、その評価の対象となった ENTITY だけである (例 *She is pretty!*) が、時には、例えば *She is pretty to look at!* のように、その対象に働きかけた主体の行為 (PROCESS) を *to* 不定詞を使って顕在化させることもある。基本的には ENTITY を分化して表す形容詞であるが、時として、ENTITY だけでなく PROCESS をも分化して表すことができる形容詞なのである。

篠原によれば、*easy* のような TYPE 3 の形容詞や *sad* のような TYPE 6 の形容詞は、どちらも、元來、ENTITY と PROCESS とが未分化な状態にある形容詞であり、タイプによって様々な中核を求めることができる形容詞だということである (cf. 篠原 (2002: 280))。ENTITY だけを分化させて言語的に顕在化させることもできれば、PROCESS だけを分化させて言語的に顕在化させたり、また、ENTITY と PROCESS の両方を分化させて言語的に顕在化させたりすることができる形容詞であるというわけである。

honest などの TYPE 4 の形容詞と *cold* などの TYPE 5 の形容詞がスケールから少し外れているのは、これらの形容詞が他の形容詞とは異なる特徴を持っているからである。TYPE 4 の形容詞に関して言えば、例えば *He is stupid to do so!* のように、ENTITY と PROCESS の両方を分化して表すことができるものの、分化された PROCESS が、対象に対して行った主体の行為ではなく、主体によってそのように認識されることになった対象の行為であるという点でこれまでの形容詞とは異なる。また、TYPE 5 の形容詞は、ENTITY だけを分化させて表す形容詞であるが、その分化された ENTITY が、対象であっても、主体である<私>であってもいいだけでなく、場所であったり、主体である<私>の身体部分であったりしてもいいという点で他の形容詞とは異なる。

この篠原の分類でさらに興味深いのは、日本語では何の違いもなく同じ情意形容詞として分類されている「悲しい」と「うれしい」が、英語においては、TYPE 6 と TYPE 7 という異なるタイプの形容詞として分類されているという点である。これは、上述したように、TYPE 6 の形容詞が ENTITY だけでなく PROCESS

をも分化させられるのに対し、TYPE 7 の形容詞が ENTITY しか分化させられないからであるが、なぜ英語においては情意形容詞にこの2つのタイプが存在するのか、また、なぜ英語の情意形容詞と日本語の情意形容詞とでこのような違いが見られるのかということに関する答えはまだない。今後の考察を要する事実である。

いずれにせよ、このようにさまざまなタイプの形容詞を分析しながら、篠原は、複数の主語選択の可能性を許す形容詞の存在をメトニミーとの関連で次のように説明している。

... 基本的には形容詞による事態把握の仕方は、日本語、英語にかかわらず、同一の domain (同一経験、知識体系) 内の profile の選択の差から生ずるメトニミー的認知が関係しているといえるであろう。つまり、もやもやした感覚の中から複数の中核を求めるプロセスというのはまさしくこの単一の domain 内で生ずるメトニミー的認知にほかならず、そういう把握の仕方をするからこそ複数の主語選択の可能性が許容されるのであると考えられる。

(篠原 2002: 268、筆者下線)

篠原の言うように、確かに、日本語、英語にかかわらず、複数の主語選択を可能にする形容詞のその主語選択には、その形容詞に関する意味経験の中の何を中核として選び出すかというメトニミー的認知が関与していると言える。しかし、英語と日本語とでは、形容詞の主語選択に関して少ないながらも違いが見られる。2.2 で見たように、日本語の形容詞には、情意形容詞を中心として、その主語が主体であっても客体であってもいいようなものが数多く存在するのに対し、英語にはそのような形容詞は少なく、主語が主体であるか客体であるかによって異なる語彙が用いられることが多いようである。(18) は、『ランダムハウス英和大辞典』(第2版)を参考にしながら、いくつかの形容詞を何を主語としてとるかに基づいて分類してみたものであるが、この事実からも、英語の形容詞においては、主体を主語としその主体の情意を表すのか、客体を主語としその客体の状態を表すのか語彙レベルで規定されている傾向があることが見てとれる。

- (18) a. 対象主語: pleasing, interesting, exciting, dreary, tiresome, disgraceful, terrifying, dreadful, beloved, gloomy, solitary, etc.
 b. 主体主語: pleased, interested, excited, tired, happy, sorry, shy, ashamed, angry, lonely, etc.
 c. 基本的に主体主語、拡張例として対象主語もとれるもの: sad, sorrowful, weary, etc.

日本語の形容詞には、主体の情意と客体の状態の両方を表せるものが多く存在するのに対し、英語の形容詞においてはそのどちらの意味を表すかが語彙レベルで決まってしまうというのなら、同じ形容詞でも、日本語と英語とでは、重ね合わせられる意味の世界が少し異なるということになる。

次節では、このような英語と日本語の違いをさらに明確なものとするために、英語と日本語の転移修飾の例を見ていくことにする。転移修飾とは、「悲しい空」「うれしい酒」などのように、本来主体 — この場合の主体とは、時枝と同じく、その情意の主体のことを指す。基本的には、<私>であるが、(8) のように <私>以外の人がその情意の主体となる場合も含む — の情意を表す形容詞が、その情意の意味を保持したまま、統語的には本来情意を持たないはずの対象(客体)を修飾するというかたちをとっている用法のことである。主体の情意を、情意を持たない対象(客体)に投影した用法と言ってもいいかもしれない。もし、上述したように、日本語は、主体の情意と客体の状態の両方を表す、言い換えれば、主客未分な意味を表す形容詞が多く、英語は、この2つの意味のどちらか一方を表す形容詞が多いというのなら、日本語において

は転移修飾という現象が一般的で非常によく見られる現象であるのに対し、英語においてはあまり見られず、たとえ見られたとしても、日本語の場合とは異なり、非常に特異な例として解釈される傾向があると言える。

3. 転移修飾

転移修飾とは、次のように、主体の情意を表す言語表現が、その情意の意味を保持したまま、統語的には情意を持たない対象を修飾しているという用法である。

- (19) a. 女はじっと悲しい空を見上げた。
 b. 父には今夜どうれしい酒はなかった。
 c. 男は、つかれた夜道をとぼとぼ歩いて帰っていった。 (山梨 1995: 179)

(19)において、悲しんだり、うれしがったり、疲れたりしているのは、これらの語によって修飾されている「空」や「酒」や「夜道」ではない。その情意の主体である「女」や「父」や「男」である。つまり、(19)の「悲しい」「うれしい」「つかれた」という言語表現は、統語的には「空」「酒」「夜道」という対象を修飾しているにもかかわらず、意味的には、その対象を見上げたり、飲んだり、あるいは、その対象にそって歩いたりしている主体の情意を表しているのである。

英語における転移修飾の例として、山梨 (1995) は次のようなものを挙げている。

- (20) He had taken a dreary road, darkened by the gloomiest trees of the forest ... (山梨 1995: 179)

しかし、この *dreary* の例を (19) の日本語の例と同等に扱うことはできない。なぜなら、(19) の「悲しい」「うれしい」は、基本的に主体の情意を表す形容詞であり、「つかれた」も主体の身体的及び心理的状态を表す言語表現であるのに対し、(20) の *dreary* は、「悲しくさせる」「憂鬱にさせる」などといった日本語訳からも分かるように、主体の情意ではなく、悲しいとか憂鬱だとかいう感情を主体に抱かせるような対象の状態や性質を表す言語表現だからである (cf. OED, 『ランダムハウス英和大辞典』(第2版))。 (19) のような、主体の情意を表す言語表現がその意味を保持したまま統語上は対象を修飾しているという用法を転移修飾と呼ぶのなら、もともと対象のある状態や性質を表す *dreary* が対象である道を修飾しているこの (20) の例を転移修飾と呼ぶことは厳密にはできない。

このことは、転移修飾という現象においても日本語と英語とで何らかの違いが見られることを示唆している。以下では、日本語と英語の転移修飾の例を考察しながら、この違いを明らかにしていくとともに、それが2.3.で述べた日本語と英語の形容詞の違い — すなわち、日本語の形容詞には、「面白い」をはじめとして、主体の情意を表しているとも客体の状態 (あるいは性質) を表しているともとれる形容詞が数多く存在するのに対し、英語の形容詞においては、主体の情意を表すのか客体の状態を表すのか言語レベルで明確に区別される傾向があるということ — に起因していることを述べる。

3.1. 日本語の転移修飾

山梨 (1995) も述べているように、日本語では、転移修飾という現象は日常的に広く見られる現象である。次の例を見てみよう。

- (21) a. なつかしい故郷

- b. 楽しい一日
- c. 腹立たしい態度
- d. 悲しい結果
- e. 憂鬱な日曜日 (山梨 1995: 180)

日本語において転移修飾がよく見られるのは、転移修飾でよく用いられる情意形容詞の多くが、主体の情意を表しているとも、また、そのような情意を主体の中に引き起こした客体の状態や性質を表しているとも解釈できるものであること (cf. 2.2.) に起因していると思われる。また、転移修飾とは、主体の情意を表していながら形式的には客体を修飾している用法のことであるが、このような用法は、日本語の情意形容詞にもともと見られた用法である (cf. (11), (13-15))。このことも日本語において転移修飾がよく見られる原因の1つと考えられる。

3.2. 英語における転移修飾の例とそれによって修飾される名詞句との関係

(21) の日本語の転移修飾に対応する英語の例とはおそらく次のようなものである。

- (22) a. one's {beloved/dear old} home
- b. a {happy/nice/pleasant} day
- c. one's provoking attitude
- d. a sad end
- e. {gloomy/blue} Sunday

(22) で下線を引いた語句は、*happy* と *sad* 以外、主体の情意を表す形容詞ではない。(19) の *dreary* と同様、主体の中にある感情を引き起こさせるような対象の状態や性質を表す形容詞である。このことは、英語においては、厳密な意味での転移修飾という現象が日本語ほど日常的に見られるものではないということを示していると言える。

このような転移修飾に関する英語と日本語の違いは、2.3. で述べた英語と日本語の形容詞の意味における違い — すなわち、日本語の形容詞には、主体の情意を表しているとも客体の状態 (あるいは性質) を表しているともとれる形容詞が数多く存在するのに対し、英語の形容詞においては、多くの場合、主体の情意を表すか客体の状態を表すかが語彙レベルで明確に区別されているということ — と深く関わっていると考えられる。3.1. でも述べたように、主体の情意を表しているともまた客体の状態を表しているともとれる情意形容詞が多く、また、その一般的な用法として、その情意の機縁となったもの (客体) を修飾するという用法が見られる日本語においては、主体の情意を表していながら形式的には客体を修飾しているという転移修飾の用法がよく見られるのは当然のことである。一方、主体を修飾する (主体の情意を表す) か客体を修飾する (客体の状態を表す) かが語彙レベルで明確に区別されることの多い英語の形容詞においては、主体の情意を表す形容詞がその情意の意味を保持したまま客体を修飾するということは (たとえそれが情意の機縁となったものであったとしても) ほとんどないということになる。通常、そのような場合には、(19) の *dreary* や (22) の *provoking* や *gloomy* のように、ある情意を主体の中に引き起こした客体の状態や性質を表す形容詞が用いられるのだが、このことから、英語においては、主体の情意を表していながら形式的には客体を修飾するという転移修飾の用法が非常に特異な用法であることが分かる。

英語の転移修飾が特異な現象であることは、これが、次に示すように、詩や小説、新聞や雑誌の見出し、

店名や製品名などといった創造的な言語使用の場でよく見られるという事実からも窺える(括弧には、それぞれの例が具体的にどのような場で用いられたものであるかを示しておく)。

- (23) During the whole of a dull, dark, and soundless day in the autumn of the year, when the clouds hung oppressively low in the heavens, I had been passing alone, on horseback, through a singularly dreary tract of country, and at length found myself, as the shades of the evening drew on, within view of the melancholy House of Usher.⁵

(Edgar Allan Poe, *The Fall of the House of Usher*. 273)

- (24) long, tired road for some players (US Senior Open に関するウェブページのタイトル)

- (25) a. Happy wine and sake (インターネット上での店の名前、日本人による造語であるらしい)

b. Happy Shower Curtain (製品名)

c. Happy Happy Rice Shower (歌詞のタイトル)

d. Happy wine evening (商品の宣伝広告)

- e. In the greenest of our valleys, / By good angels tenanted, / Once a fair and stately palace — / Radiant palace— reared its head. / ... / And every gentle air that dallied, / In that sweet day, / Along the ramparts plumed and pallid, / A winged odour went away. / Wanderers in that happy valley / Through two luminous windows saw / Spirits moving musically / To a lute's well-tuned law, / ...

(*The Fall of the House of Usher*. 284-85、この小説に出てくる詩の一節)

- (26) When it gets dark, I'll leave a spark upon your weary sky for you to rest and find. Everlasting rest. For that's what you miss in our love. I know that's what you miss. (ウェブページの中の詞的な文章)

- (27) He was led through intricate passageways and past hung armored trophies to Roderick Usher's inner chamber, a sorrowful room where sunlight had never entered. Usher himself looked equally shut in, almost terrifying: ...

(*The Fall of the House of Usher* に関するエッセイの一節)

- (28) a. a long lonely day (歌詞の中で用いられた句)

b. a lonely sky (詩の中で用いられた句)

これらの例を見ていくと、転移修飾によって修飾されやすい名詞句というものがあるようで、例えば、*day* などの時間を表す名詞句や *sky* などの自然物を表す名詞句がその典型であると思われる。このことは、例えば、*busy* が、(29) のように *days* と共起した場合には、転移修飾表現として解釈されるのに対し、(30) のように *street* と共起した場合には、その通りの属性を表す形容詞として解釈されてしまう、という事実からも分かる。

- (29) busy days

- (30) A busy street is a road where much is happening, especially one that has a lot of traffic. (ウェブページより)

この *busy* の例は、同じ形容詞でも、また、それが同じように主体以外のものを修飾対象としている場合であっても、その修飾先が何であるかによって、主体の情意を表す転移修飾の例と解釈されるのか、それとも、客体の状態を表す形容詞の例と解釈されるのかが変わってくるということを示している。これは、日本語よりも英語においてより顕著に見られる現象のようで、例えば、日本語においては、(30) に対応する「忙しい通り」は、もちろん、その通り自体の、例えば、車や主体を含む人々が毎日せわしなく行き交う通りであるというような特徴を表しているとも解釈できるが、それだけでなく、その通りを通る主体（<私>を含めてその通りを通る人全員）の心理状態を表しているとも解釈できる。英語の形容詞は、日本語の形容詞とは異なり、語彙だけでなく、何を修飾しているかというその用法においても、主体的意味と客体的意味とを明確に分化する方向で発展してきたと言えるのかもしれない。⁶

次に挙げる英語の *angry* の例も、転移修飾に関するまた別の興味深い事実を提供している。*angry* は、例えば、転移修飾でよく修飾される *sky* と共起した場合にも、基本的には、主体の情意を表す転移修飾表現としてではなく、客体の状態を表す擬人化表現として解釈される。(31) を見てみよう。

- (31) a. Under an angry sky, I hiked down to the ghostly shore of Spirit Lake (ウェブページより)
 b. An Angry Sky and Strong Winds Greet Anglers at the 49th Annual Texas State Bass Tournament
 (ウェブページのタイトル)
 c. The angry sky. A scene from the recent California fires? No, the view from my back yard. We've had a stormy weather here today, and the clouds began breaking near sundown. (ウェブページより)
 d. How an angry sky and sea make a cyclone able to devastate a city
 (The Guardian (1999年11月1日) の中の記事の見出し)

しかし、同じ *angry sky* でも、例えば、(32) のように、先行する文脈に *angry* という情意の主体となる人 (*angry people*) を容易に見つけることができる場合には、空の客観的な様相を擬人的に表す擬人化表現とも、また、「怒っている人々」のその情意を空に投影した転移修飾表現とも解釈できる。

- (32) Angry people under an angry sky bewildered, suffering Iraqis are demanding to know the answer to one question: is this democracy? (ウェブページより)

この *angry* の例は、先行文脈にその情意の主体となる人を容易に見つけられるか否かも転移修飾か否かを決定する重要な要因となることを示している。因みに、日本語でも、例えば、「僕はこの怒った空の下東京に向かった」はおそらく擬人化としての解釈しかできないのに対し、「怒った空の下で、人々は日々暴動を繰り返した」の場合には転移修飾とも擬人化とも解釈できる。もちろん、英語の *angry sky* と日本語の「怒った空」には、*angry sky* の *angry* が、一般に、その空の状態を擬人的に表している擬人化表現としてしか解釈できないのに対し、日本語の「怒った空」の「怒った」にはそのような制限はなく、文脈によって擬人化とも転移修飾とも解釈できるという違いがあるが、この「先行文脈にその情意の主体となる人を容易に見つけられるか否か」という点に関しては、英語であれ日本語であれ、転移修飾か擬人化かを判断する要因の1つとなっているようである。このことは、さらに、転移修飾と擬人化とは、文脈がなければ、実際には、明確に区別できるようなものではないことを示唆していると思われるが、これについては、次節で詳しく見ていくことにする。

その他、英語には次のような例も見られる。

- (33) a. She moved slowly to the corner and stood looking down at the wasted face, into the wide, frightened eyes.
Then slowly she lay down beside him. (John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*. 580)
- b. When a door, at length, closed upon her, my glance sought instinctively and eagerly the countenance of the brother — but he had buried his face in his hands, and I could perceive that a far more than ordinary wanness had overspread the emaciated fingers through which tricked many passionate tears. (Usher. 281)

(33a) で、「顔」や「目」に投影されているのは「彼」(飢え死にしかけている男)のその時の情意であり、また、(33b)で「涙」に投影されているのは「彼」(アッシュヤー)のその時の情意である。しかし、これらを転移修飾の例とするには問題がある。なぜなら、「顔」や「目」や「涙」は、主体とは分離不可能なものであり、それゆえ、これまで見てきた「日々」や「空」のように、主体とは無関係に存在し、転移修飾によって修飾されるに足る、客体性の高い対象とは言えないからである。このことは、修飾される対象の客体性がどの程度であるかという点もそれが転移修飾であるか否かを決定する要因の1つとなることを示している。

(33) 同様、次の (34) のような例も転移修飾とするには問題がある例である。(34a)の「しゃれ」も(34b)の「空想」も、その情意の主体によって生み出されたものであり、それゆえ、客体性の高いものとは言えないからである。

- (34) a. ... I had called it a favorite of Usher's more in sad jest than in earnest. (Usher. 292)
- b. ... although I at once concluded that my excited fancy had deceived me (Usher. 293)

この (33) や (34) の例と上述した *busy* や *angry* の例から、主体的な意味を表すか客体的な意味を表すかを語彙レベルで区別したがる英語の形容詞においては、その用法においてもその区別が重視され、主体の情意を表す形容詞がその修飾対象として客体をとった場合に、もとの情意の意味が失われ、代わりに、その客体の状態や性質に関わる意味が表されるようになる、という傾向があることが分かる。この傾向は、その対象の客体性が高ければ高いほど、また、その文脈にその情意の主体となる人を見つけてくれば見つけにくいほど、強くなるようで、それによって、主体の情意を表したまま対象を修飾するという転移修飾の用法と、もとは主体の情意を表していた形容詞がその情意の意味を失って客体の状態や性質に関わる意味を表すようになるという擬人化などの用法との間に、(23-28) - (33-34) - (30), (31) のような段階性があることが見てくる。次節では、転移修飾と擬人化との関係を、この修飾される対象と主体との関係に注目して論じていくことにする。

3.3. 転移修飾と擬人化の関係

転移修飾とは、ある時点における主体の内面的あるいは心理的状态を対象に投影していくという認知プロセスを介して、主体の情意を表す言語表現が、その情意の意味を保持したまま、統語的にはその主体ではなく対象を修飾するというかたちをとる用法のことを言う。どのような対象をとるかによって、転移修飾は大きく2つのタイプに分けられる。1つは、例えば、(19)の「悲しい空」「うれしい酒」、(21)の「楽しい一日」、(29)の *busy days* などに見られるような、同一意味経験内の主体と客体との時空間的な近接性に基づくもので、もうひとつは、例えば、(21)の「なつかしい故郷」、(25)の *a long, tired road* のように、同一意味経験内の主体の情意とその主体の情意の「機縁」(cf. 時枝 (1973)) となったものとの因果関係に基づくものである。いずれの場合も、同一意味経験内の主体と客体との近接関係に基づくもので、その意味で、メトニ

ミーによる言語の創造的な使用法の1つであると言える。

一方、擬人化は、本来人間の属性、行為、様態などを表す言語表現だったものが、子供にも見られる「自己を基点として対象に重ね合わせる(岩田1988:169)」という認知プロセスを介して、人間以外のものの属性、行為、様態などを表すため用いられるようになることを言う。次の例を見てみよう。

(35) Over the high coast mountains and over the valleys the gray clouds marched in from the ocean. The wind blew fiercely and silently, high in the air, and it swished in the brush, and it roared in the forests. The clouds came in brokenly, in puffs, in folds, in gray crags; and they piled in together and settled low over the west. And then the wind stopped and left the clouds deep and solid. The rain began with gusty showers, pauses and downpours; and then gradually it settled to a single tempo, small drops and a steady beat, rain that was gray to see through, rain that cut midday light to evening. And at first the dry earth sucked the moisture down and blackened. For two days the earth drank the rain, until the earth was full. . . . (Wrath: 553)

この例では、人間以外のもの、すなわち、雲、風、雨、地面が、あたかも人間と同じように、行進したり、怒ったり、鞭で打ったり、うなり声をあげたり、などといった行為を行うものであるかのように描かれている。つまり、擬人化とは、人間以外のもの — これは、(35) のように自然物であってもいいし、家などの無生物 (cf. Kövecses (2002: 58)) であっても、また、人生などといった抽象物 (cf. Lakoff and Johnson (1980: 33-34)) であってもよい — を人間との関連で理解していくというメタファーに基づく言語の創造的な使用法の1つなのである。⁷

しかし、3.2. で見た *angry sky* の例は、この両者の間に段階性があることを示している。Lakoff and Johnson (1980) は、概念メタファーの基盤には、経験の類似性だけでなく、経験の共起性もあると言っている (cf. Lakoff and Johnson (1980: 155))。また、Goossens (1990) や Johnson (1997) は、これまでメタファー的拡張と呼ばれてきたもののいくつかは、実は事態間の共起関係を基盤として成立したものであることを明らかにしている。これらの研究に基づいて *angry sky* の例を考えてみると、この例においては、本来主体の情意(「腹立たしい」)を中心とする意味世界を表していた形容詞が、主体というものを、主体と時空間的に近いものにまで広げていくという認知プロセスを介して、転移修飾の用法(32)を獲得し、やがてその中の主体と客体とを再び分離させ、そのうちの後者の状態を主体を含む人間一般の感情との関連で解釈し直すという認知プロセスを経て、「荒れ狂った」という客体の状態に関する擬人的な意味を獲得するに至ったと考えることができる。つまり、擬人化表現の中には、主体を拡大していくことで成立した転移修飾の用法から、その意味の中の主体と客体とを分化し、そのうちの主体の側を起点領域、客体の側を目標領域として、客体の状態を再解釈していくという認知プロセスを経て成立するものもあるということである。この再解釈において、起点領域である主体の側が主体個人ではなく人間一般になるのは当然のことである。客体の状態という客観的なものを誰にでも分かるようなかたちで表すには、それを人間一般の感情との関連で理解し表現していく必要があるからである。

しかし、この転移修飾から擬人化への移行には、英語と日本語とで違いが見られるようで、例えば、上述した *angry sky* の *angry* は、基本的には、客体である空の状態を擬人的に表す擬人化表現としてしか解釈できないのに対し、これに対応する日本語の「怒った空」の「怒った」は、その空の状態を擬人的に表す擬人化表現とも、また、その空の下にいる主体(<私>を含む人々)の心情をその空に投影した転移修飾表現とも解釈できる。英語においては、主体の情意を表す形容詞がその修飾先を客体とした場合に、そのもとの情意の意味を失い代わりに客体の状態に関する意味のみを表すようになる傾向があり (cf. 3.2.)、その結果、

主体の情意を客体に投影した転移修飾表現としてではなく、客体の状態を擬人的に表す擬人化表現として、あるいは、主体の情意から推論される客体の状態や性質を表す言語表現として再解釈されてしまうのに対し、主体の情意を表す形容詞が客体の状態をも表すようになるという傾向が古くから見られる日本語においては、主体の情意を表す形容詞がその修飾先を客体とした場合にも、主体の情意から客体の状態への意味の転換は見られず、文脈によって、転移修飾表現とも、擬人化表現とも、また、主体の情意から推論される客体の状態や性質を表す言語表現とも解釈される、というわけである。

3.4. 客体の状態を表す形容詞の主体化

ところで、形容詞の様々な用法を調べていくと、客体の状態を表す形容詞が、本来は顕在化させることのないその背後にいる主体を強く感じさせるような場合があることに気付く。次の例を見てみよう。

(36) 何にても道具扱ふたびごとに取る手は軽く置く手は重かれ (利休百首より)

(36) は、「どのような道具であっても、それを持ち上げる時の所作は軽く、置く時は重く見えるようにしなさい」という意味である。軽かったり重かったりするの、これらの形容詞の主語である「取る手」や「置く手」ではなく、道具あるいはその道具を扱う時の主体の所作なのである。本来客体の状態を表す「軽い」「重い」が、その意味を拡張させて主体の側のある側面をも表せるようになってきていることから、これを、状態を表す形容詞の主体化と呼ぶことにする。

興味深いことに、この英訳 (36)' では、重かったり軽かったりするの道具である。

(36)' Whatever utensil you handle, pick it up as if it were light and put it down as if it were heavy.

実際に重くあるいは軽く見えるように取り扱われるのは道具であるから、この英訳は間違っていないのだが、(36) では形容詞の主語の意味の中に組み込まれていた主体の所作に関わる側面が (36)' では *pick it up* や *put it down* というかたちで言語的に顕在化させられているために、この英訳はやや解説的な表現だと感じる。日本語においては、形容詞の多くが主客未分な意味世界を表し、それゆえ、その主語として主体 (に関するもの) も客体 (に関するもの) もとることができるのに対し、英語の形容詞においては、主体的な意味を表すのか客体的な意味を表すのかが語彙的にも用法的にも明確に区別される傾向があるために、日本語のようなコンパクトな表現ができなかったということかもしれない。

上述の日本語の例とは異なるが、英語においても、対象の状態を表す形容詞が、その背後にいる主体を強く感じさせる場合がある。次の例を見てみよう。

(37) The rain began with gusty showers, pauses and downpours; and then gradually it settled to a single tempo, small drops and a steady beat, rain that was gray to see through, rain that cut midday light to evening. (Wrath: 553)

gray は、対象の色 (あるいは明暗) を表す形容詞である。篠原 (2002) も指摘しているように、このタイプの形容詞 (TYPE I) は、通常、対象 (ENTITY) だけを分化させる形容詞であり、その対象の判断に関わる主体の行為 (PROCESS) を分化させ、それを *to* 不定詞を用いて言語的に顕在化させることはない (cf. 篠原 (2002: 264-65))。ところが (37) では、*gray* が対象である「雨」を「灰色だ」と判断するに至った「それを通して見る」という主体の行為を表す *to* 不定詞を後続させている。このような主体の行為の顕在化によって、

(37) の *gray* は — というより、*rain (that) was gray to see through* という句はと言うべきかもしれないが — 主体を強く感じさせる言語表現となっている。(36) の日本語の例とは異なるが、このような英語の例も、客体の状態を表す形容詞の主体化と言えよう。

ところで、篠原(2002)によれば、英語の形容詞の中で、主体の行為を分化させそれを *to* 不定詞で表すことのできるものは、*pretty, tough, easy, difficult* などの評価形容詞と *sad* などの一部の情意形容詞のようである (cf. 篠原(2002: 264-65))。(37) の *gray* とこれらの形容詞との関係を、篠原の提示した PROCESS/ENTITY の未分化・分化に関するスケール (cf. 図2) との関連で解釈すると、(37) の *gray* は、客体の状態を表す形容詞の評価形容詞化であると言える。川端(1958)の考えに従えば、評価形容詞は情態形容詞的でありながら情意形容詞に近づいている形容詞であるから、*gray* の評価形容詞化とはすなわち *gray* の情意形容詞化、*gray* の主観化、ということになる。

4. 形容詞を超えて：対象の状態を表すさまざまな主体の情意・状態表現

4.1. 擬人化と主体移動：両者は本当に相容れないものか

山梨(2004)は、いわゆる主体移動表現が擬人化表現とは共起不可能であると考えられることから、両者を異なるタイプの言語表現として分析している。(38-39)は、山梨(2004)が主体移動表現の例として挙げているものであるが、これを見ると、主体移動表現は、(b)のように下線を引いた擬人化表現と共起した場合に非文になることが分かる(容認度は山梨(2004)に基づく)。

(38) a. 山脈が東から西に走っている。／山脈が西から東に走っている。 (山梨2004: 6)

b. *山脈が嬉しそうに東から西に走っている。／*山脈が一生懸命に西から東に走っている。 (Ibid.:8)

(39) a. 突堤が海に突き出ている。／半島が東に延びている。／山が海に迫っている。 (山梨2004: 6)

b. *突堤がためらいながら海に突き出ている。／*半島が東にひたむきに延びている。／*山が海にやさしく迫っている。 (Ibid.:8)

しかし、山梨は、(b)の文がなぜ容認不可能になるのかについて詳細な説明を与えているわけではない。また、山梨が容認不可能と判断した(b)の文の中でも「山が海にやさしく迫っている」に関しては、私を含め、幾人かが容認可能であるとしている(大沼 p.c.)。

そこで、まず、山梨がなぜ(b)の文を容認不可能と判断したのかという点について考えてみたい。(b)の文における「嬉しそうに」「一生懸命に」「ためらいながら」「ひたむきに」「やさしく」という言語表現を山梨の言うように擬人化表現として解釈すると、これらの言語表現は、主語で表された対象(山脈、突堤、半島、山)の状態を見た主体が、「もし、その対象が人間だったら、こんな内面的状態、こんな心理的状态のとき、そんなふうな状態になるだろうなあ」という推論を介して理解した、その対象の実際には存在しない内面的あるいは心理的側面を表した言語表現だということになる。3.3.でも述べたように、このような言葉の使用の背後には、人川以外のものの状態を人間との関連で理解していこうとするメタファーの認知プロセスがある。一方、主体移動表現とは、主語で表された対象の実際の移動を表す言語表現ではなく、これを発話している主体自身あるいはその主体の視線または注目点の移動を表す言語表現であり (cf. Talmy(1996))、また、そのような主体的な移動を介して見えた客体の形状、すなわち、客体に関する主体の〈見え〉を語る言語表現である (cf. 本多(2002))。したがって、(b)の文は、主体による客体の〈見え〉を語っていないながら、その〈見え〉の中に本来入るはずのない、主体が人間との関連で想像的に理解した客体の内面的あるいは心

理的状態をも表しているということになる。この矛盾が、山梨に (b) を容認不可能な文と判断させた理由であると思われる。

しかし、先にも述べたように、日本語母語話者の中には、山梨が容認不可能とした「山が海にやさしく迫っている」を容認可能とする者もいる。このような話者は、これ以外にも、例えば、次のような文も容認可能であるとする。

- (40) a. 突堤が海に向かってつつましく突き出ている。
 b. 半島が (海に向かって) ためらいがちに／ひっそりと延びている。

一部の日本語母語話者であるとはいえ、これらの文を容認可能と判断する者がいるのは一体なぜだろうか。(39b) の「やさしく」や (40) の「つつましく」「ためらいがちに」「ひっそりと」が、(38b) の「嬉しそうに」「一生懸命に」や (39b) の「ためらいながら」「ひたむきに」と異なるのは、前者が対象の形状を容易に推測させる言語表現だという点である。例えば、山が海に「やさしく」迫っているというのなら、その場合の山の形状とは、海からゆるやかに登っていく形状であろうと推測される。また、海に向かって「つつましく」突き出ている突堤とは、おそらく、とても小さく、短い突堤であろうし、「ためらいがちに」と延びている半島とは、とても小さい半島、「ひっそりと」延びている半島とは、人に知られるような大きく目立つようなものではなく、よくよく注意してみると「ああ、半島だったんだ」と気付くようなあまり存在感のない半島であろうと思われる。擬人化表現であっても、このように客体の形状を推測させるものであれば、主体による客体の〈見え〉を語る主体移動表現との矛盾は解消され、結果として、主体移動表現と共起することが可能になるのである。

ところで、(38-39) の (a) の例を含め、日本語の主体移動表現では通常「～ている」という言語表現が用いられる。主体移動表現とは、主体的移動を介して捉えられた対象についての〈見え〉を直接表す言語表現である。主語はその〈見え〉の中核となるものであるから、主体移動表現は、形容詞文同様、私たちの判断 — これは非時間的なものである (cf. 尾上 (1985: 35)) — の形式に直接対応している言語表現であると言える。しかし、主体移動表現には形容詞文とは異なる側面もある。客体の (恒常的な) 性質ではなく、ある時点におけるある視点からの主体的移動を介して捉えられた客体の形状を表しているという点である。このことは、同じ道の形状がその視点の取り方によって「この道は奈良から京都に向かって走っている」とも「この道は京都から奈良に向かって走っている」とも言えることから分かる。つまり、主体移動表現とは、ある時点におけるある視点からの主体の認知を介して捉えられた、客体の〈見え〉に関する主体の判断を直接表す言語表現なのである。主体移動表現において、現在形でも、過去形でもなく、「～ている」形式が用いられるのはこのためだと思われる。

(38-39) の (b) の文にかえて、山梨の解釈とは異なるが、これらの文の「嬉しそうに」「一生懸命に」「ためらいながら」「ひたむきに」を、擬人化ではなく、主体の発話時における内面的あるいは心理的狀態を表す言語表現として解釈してみよう。その場合にも、やはり、(b) の文は容認不可能となる。主体が自らの〈見え〉を語っているにもかかわらず、その〈見え〉の中に本来入るはずのない自分の内面的あるいは心理的狀態をも入れてしまうことになるからである。

(41) の英語の例も、(38-39) の (b) の文と同じ理由で — 下線を引いた語句を擬人化表現ととらうが、発話時における主体の内面的あるいは心理的狀態を表している言語表現ととらうが — 容認不可能な文となる。

(41) *The road runs {angrily/happily/desperately} through the park. (Matsumoto 1996: 361)

次の(42-46)における(b)の文がなぜ容認不可能となるかも(38-39)の(b)の文の場合と同じように説明することができる(cf. 山梨(2004: 11-14))。

(42) a. キャンプ場が近づいて来た。

b. *キャンプ場が急いで/忙しそうに近づいて来た。

(43) a. 岸壁が迫って来る。

b. *岸壁が慌ただしく/ためらいながら近づいて来た。

(44) a. 電信柱がビュンビュン後ろに飛んで行く。

b. *電信柱が慌ただしくビュンビュン後ろに飛んで行く。

(45) a. 景色が背後に遠ざかって行く。

b. *景色が恥ずかしそうに背後に遠ざかって行く。

(46) a. 坂道を登って行くにつれて民家が沈んで行く。

b. *坂道を登って行くにつれて民家がためらいながら沈んで行く。

下線を引いた語句を対象の内面的あるいは心理的状态を表す擬人化表現として解釈した場合、これらの語句は、上述の「やさしく」「つつましく」「ためらいがちに」「ひっそりと」とは異なり、対象の〈見え〉を推論させるような語句ではないため、文全体としては主体による対象の〈見え〉を語っているにもかかわらず、その〈見え〉の中に本来入るはずのない対象の内面的あるいは心理的状态をも入れてしまうことになり、結果として、(b)の文は容認不可能な文となる。また、下線を引いた語句を発語時における主体の内面的あるいは心理的状态を表したものと解釈しても、(b)の文はやはり容認不可能になる。対象についての主体の〈見え〉を語っているながら、その〈見え〉の中に本来入るはずのない自分の内面的あるいは心理的状态を入れてしまうことになるからである。

4.2. 主体移動表現と主体の移動の様態や主体の情意を表す言語表現

主体移動表現が、その〈見え〉の中に本来入るはずのない主体に関するいかなる言語表現とも共起できないのかというと、そうではない。擬人化表現の中でも客体の形状を推論させるようなものであれば主体移動表現と共起できたように、主体に関する言語表現であっても、それが客体の形状を推測させるようなものであれば、主体移動表現と共起可能である。次の例を見てみよう。

(47) その道は(海に向かって) ゆっくりと下っていつている。

「ゆっくりと」は、主体の(実際のあるいは虚構の)移動の様態、あるいは、主体の視線や注目点の移動の様態を表す言語表現である。(47)のように、これが主体移動表現と共起可能なのは、「ゆっくりと下っていつている」という語句が、私たちに、その道の形状(例えば、緩やかな下り坂になっていること)を

推論させるからである。同じような例が英語にも見られる。

(48) The road descends slowly. (Matsumoto 1996: 362)

Matsumoto (1996) は、この文が容認可能なのは、*slowly* がこの道を移動する主体の移動の様態というよりも、むしろそこから推論されるこの道の形状を表しているからである、と述べている (cf. Matsumoto (1996: 362))。しかし、これは少し誤解を招く説明である。(47) と同様、(48) においても私たちが道の形状を推論できるのは、*descends slowly* という語句からである。何かが「ゆっくりと下る」からこそ、その道が緩やかな坂になっていると分かるのであって、「ゆっくりと」だけからはそのような道の形状は推測できない。客体の形状の推測に、共起する動詞の意味が関与していることは、例えば、「その道は(海に向かって) ゆっくりと走っている」やこれに対応する英文 *The road runs slowly (to the sea)* が容認不可能であることから明らかである。したがって、(48) の *slowly* は、やはり、(47) の「ゆっくりと」同様、動詞の意味との関連の中で客体の形状を推論させる、主体の(あるいは主体の視線または注目点の) 移動の様態を表す言語表現なのである。

また、主体の内面的あるいは心理的状态を表す言語表現であっても、次のように主体移動表現と共起可能な場合もある。

(49) a. 遊郭との界に一問ほどの溝のある九間道路が寂しく西に走っていた。

b. 道路は気持ちよく走っていた。

(大崎 p.c.)

大崎 (p.c.) は、(49) に関して、これらの文が容認可能なのは、下線を引いた「寂しく」「気持ちよく」が、(48) の *slowly* と同様、Matsumoto (1996) の言うように、道を移動している主体の内面的あるいは心理的状态を表しているのではなく、むしろそこから推論される道の形状を表しているからである、という説明をしている。しかし、この説明には少し無理がある。まず、「寂しく走る」とか「気持ちよく走る」とかいうことから、「ゆっくりと下る」と同じように、客体であるその道の形状を推測することはできない。第2に、そもそも(49)の「寂しく」「気持ちよく」は、(48)の *slowly* や(47)の「ゆっくりと」とは、その意味するところが異なる。*slowly* や「ゆっくりと」は、本来、行為の様態を表す言語表現であり、「寂しく」「気持ちよく」は、川端や時枝の議論からも分かるように、本来主体の情意を表す言語表現である。

本稿のこれまでの議論からも分かるように、「寂しい」「気持ちよい」という形容詞は、主体の情意に加えて、対象の状態をもその意味として表すことのできる情意形容詞であり、その主語として、もとから、主体である「私」だけでなく、その情意の機縁となった<事柄>や、その<事柄>の直接的な中核である<もの>をもとることができる。したがって、(49)の「寂しい」や「気持ちよい」は、主体の情意だけでなく、そのような情意を主体の内部に起こした対象の状態あるいは性質をも表していると考えられる。寂しかったり、気持ちよかったりするの、九間道路あるいはお道路を走っていた主体とも、また、そのような情意を主体の中に起こした「九間道路を走ること」や「道路を走ること」であるとも、また、そのような<事柄>の直接的な中核となった「九間道路」や「道路」とも解釈することができる。したがって、これらの形容詞(の連用形)が主体移動表現と共起可能なのは、*slowly* や「ゆっくりと」のように、主体の(あるいは主体の視線または注目点の) 移動の様態を表し、共起する動詞との関連の中で対象の形状を推論させるような語句だけではなく、その本来的な用法として、主体移動表現と同じように、主体的意味だけでなく客体的意味をも表せる言語表現だったからである。

このように考えると、山梨が容認不可能な文として挙げた(38-39), (42-46)の(b)のような例でさえ、主体の情意だけでなく客体の状態や性質をも表すことができる情意形容詞(の連用形)と共起した場合には(多少の容認度の差はあるだろうが)容認可能な文になると予測される。(50)はそのうちのいくつかを示したものである。

- (50) a. この地方では山脈が東から西に{おもしろく/気持ちよく/寂しく}{走っている/延びている}。
 b. ここでは突堤が海に{おもしろく/気持ちよく/寂しく}突き出ている。
 c. ここでは半島が東に{おもしろく/気持ちよく/寂しく}延びている。
 d. この地方では山が海に{恐ろしく/寂しく}迫っている。
 e. 岸壁が恐ろしく迫ってくる。
 f. 町の景色が背後に寂しく遠ざかって行く。
 g. 東京を離れるにつれて、その町並みは僕の背後に次々と寂しく沈んで行った。

下線を引いた語句は、もともと、主体だけでなく、その主体の情意の機縁となった<事柄>やその<事柄>の中核となった<もの>をも修飾することができる言語表現であり、また、主体の情意だけでなく、対象の状態や性質に関わる意味をも表すことのできる言語表現である。だからこそ、(49)の例と同様、客体の形状を表す主体移動表現と共起可能となるのである。

注意しておくが、これらの言語表現は、主体の情意の意味のみを表す「おもしろいことに」「気持ちよいことに」「寂しいことに」「恐ろしいことに」といった文修飾の副詞や「おもしろくも」「気持ちよくも」「寂しくも」「恐ろしくも」のような言語表現とは異なる。

- (51) a. {おもしろいことに/気持ちよいことに/寂しいことに}、この地方では山脈が東から西に{走っている/延びている}。
 a'. {おもしろくも/気持ちよくも/寂しくも}、この地方では山脈が東から西に{走っている/延びている}。
 b. {おもしろいことに/気持ちよいことに/寂しいことに}、ここでは突堤が海に突き出ている。
 b'. {おもしろくも/気持ちよくも/寂しくも}、ここでは突堤が海に突き出ている。
 c. {おもしろいことに/気持ちよいことに/寂しいことに}、ここでは半島が東に延びている。
 c'. {おもしろくも/気持ちよくも/寂しくも}、ここでは半島が東に延びている。
 d. {恐ろしいことに/寂しいことに}、この地方では山が海に迫っている。
 d'. {恐ろしくも/寂しくも}、この地方では山が海に迫っている。
 e. 恐ろしいことに、岸壁が迫ってくる。
 e'. 恐ろしくも、岸壁が迫ってくる。
 f. 寂しいことに、町の景色が背後に遠ざかって行く。
 f'. 寂しくも、町の景色が背後に遠ざかって行く。
 g. 寂しいことに、東京を離れるにつれて、その町並みは僕の背後に次々と沈んで行った。
 g'. 寂しくも、東京を離れるにつれて、その町並みは僕の背後に次々と沈んで行った。

これらの言語表現が、主体の情意しか表していないにもかかわらず、主体による客体の<見え>を表す主体移動表現と共起可能なのは、これらの言語表現が、例えば、「山脈が東から西に走っている」というそのことが「おもしろい」というように、捉えた事柄のいわば「外」に出てその事柄を内省したときに立ち現れてくる

主体の情意を表しているからである。

ところで、2.3. や 3.2. で述べたように、英語の形容詞やそれに準ずる言語表現においては、主体の情意を表すのか客体の状態を表すのかが語彙的にも用法的にも区別される傾向がある。これによれば、基本的に主体の情意を表す語句は主体の情意しか表せないということになるから、その意味で、英語においては、客体の形状を表す主体移動表現が主体の情意を表す言語表現と共起することは不可能であると考えられる。次の (a) は日本語の「道路が寂しく走っている」を、また、(b) は「道路が気持ちよく走っている」を、それぞれ英訳したものであるが、いずれも容認不可能である。

- (52) a. *The road runs {sadly / desolately} through the forest. / *The road runs through the forest {sadly / desolately}.
 b. *The road runs comfortably through the forest. / *The road runs through the forest comfortably.

英語の主体移動表現が主体の情意を表す言語表現と共起不可能なもう 1 つの理由は、英語の主体移動表現が、本質的に、主体の側の意味よりも客体の側の意味を中心として表す言語表現だからである。観察によれば、例えば、道の形状を表す英語の主体移動表現は、*past the country, over the mountain, straight north* などのような、その道の方向を表す言語表現 — これらは、その道を移動していく主体の（あるいは主体の視線や注目点の）移動の経路や到達点を表していると考えられるため、Langacker の研究に従えば、主体的意味を表す言語表現として分析されるものである (cf. Langacker (1998, 1999)) — と共起することが非常に多い。これは、英語の主体移動表現が、主体の存在を感じさせる言語表現ではあるもの、やはりその意味の中心となっているのは、客体の形状という客観的な側面であることを示唆していると思われる。だからこそ、英語の主体移動表現は、日本語の主体移動表現とは異なり、主体の情意を表す言語表現とは共起不可能なのである。

もちろん、英語の主体移動表現においても、日本語の (51) に対応するような主体の情意を表す文修飾の副詞 (*oddly (enough), strangely (enough), curiously (enough)* など) との共起は可能である。先述したように、この副詞が、捉えた事柄の外に出てそれを内省することで立ち現れてくる主体の情意を表す言語表現だからである。

以上の議論から、英語と日本語とでは、主体移動表現と共起できる語句のタイプに違いがあることが分かる。図 3 に示したように、英語の主体移動表現と共起できるのは、*slowly* のように、主体の移動の様態を表す語句の中でも動詞の意味との関連で客体の形状を推論させるようなものだけであるのに対し、日本語の主体移動表現は、そのような語句だけでなく、客体の形状を推論させる「やさしく」や「ひっそりと」のような擬人化表現や、主体だけでなく客体をもその修飾対象としてとれる「寂しく」「気持ちよく」などの情意形容詞（の連用形）とも共起できる。

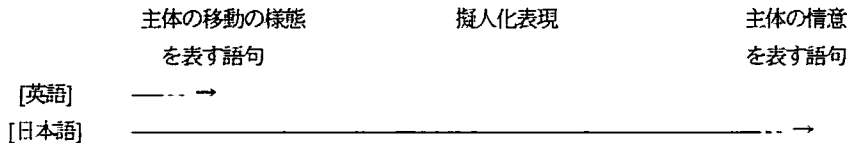


図 3 {英語/日本語}の主体移動表現と共起可能な語句

この違いは、英語と日本語とで、主体移動表現の意味するところに若干の違いがあることを示唆している。すなわち、英語の主体移動表現は、主体の存在を強く感じさせる言語表現ではあるものの、やはり<見

え>ている客体の形状がその意味するところであり、日本語の主体移動表現は、客体の形状を表しているとはいえ、やはりその背後に存在する主体に関わる側面をその意味の中にながりの割合で取り込んでいる、ということである。

主体移動表現に関する英語と日本語のこのような違いは、Slobin らの様態動詞の研究から窺える英語と日本語の違いや本稿の2節と3節で議論した形容詞や転移修飾に見られる両言語の違いと無関係ではない。Slobin らの研究は、簡単に言えば、様態動詞を多用するのは英語、様態動詞が少ないのは日本語、という両言語の違いを明らかにしたということになるのだが、この違いは、英語においては主語で表された対象(客体)の行為に関わる側面が言語によって切り取られやすい意味の側面であるのに対し、日本語においてはそうではないという両言語の違いを示唆していると言える。また、本稿の2、3節における形容詞の意味や転移修飾についての考察からは、英語の形容詞においては主体的意味を表しているのか客体的意味を表しているのか語彙的あるいは用法的に明確に区別される傾向があるのに対し、日本語の形容詞においては情意形容詞をはじめとして主客未分な意味世界を表す傾向があるということが明らかになった。このような英語と日本語の違いをここで述べた主体移動表現に見られる両言語の違いと合わせて考えてみると、英語には客体志向性という傾向が、日本語には主体指向性という傾向があるということが見えてくる。英語の主体移動表現が、上述のように、その背後にいる主体の存在を感じさせるとはいえ、やはり<見え>ている客体の形状を中心として表す言語表現であるということは、英語のこの客体指向性を反映したものであり、また、日本語の主体移動表現が、客体の形状を表しているとはいえ、その判断主体である主体に関する意味をより多くその意味の中に取り込んでいる言語表現であるということは、日本語のこの主体指向性を反映したものであると言えよう。

このような日本語の特徴は、次のような主体移動表現の存在からも理解できる。

(53) 峠路に戻れば、また巡礼の路が黙々と続く。(熊野古道に関する紀行文から)

「峠路に戻れば」「巡礼」という言葉から、この文の背後には、熊野古道巡礼の旅に出ている人がいることが分かる。また、これには実は「海山より峠に入り『夜泣き地藏』を拝して、馬越峠の一里塚を過ぎてしばらく、風の吹き抜ける峠に出る。ここから峠路をはずれて、天狗倉山の頂をめざせば、眼下には尾鷲の全景がひらける。尾鷲湾を両手で抱いたように広がる人里を、背後から山並が包み込んでいる。たどり行く先をはるかに臨む感動は、天界にいる喜びに等しい。」という文が後続しているのだが、ここから、筆者もこの巡礼の旅に出ている1人であると考えられる(「入り」「拝して」「過ぎて」「出る」「峠道をはずれて」「めざせば」「眼下には」「たどり行く」「臨む」などの表現に注意)。このことから、(53)の「黙々と」は、筆者を含む熊野古道巡礼の旅に出ている人たちの様子を表す言語表現であり、同時に、そのような人々の様子を介して、その道の形状 — おそらく、細く長く険しい道であろう — を推測させるような言語表現であると分かる。このように、主体の行為の様態を表す言語表現であっても、それが客体の形状を推測させるようなものである場合には、日本語においては主体移動表現と共起可能であるというわけである。この例からも、日本語の主体指向性が窺える。因みに、「道が黙々と続いている」を直訳した英文 *The road continues silently*: は、google 検索で1件見つかっただけである(「黙々と続く道」に対応する *the road {that / which} continues silently* のような例は1件も見つからなかった)。客体指向性の強い英語においては、やはり、このような用法はまれなようである。

主体移動表現と同じく客体の形状を表す言語表現には、次のようなものもある(下線を引いた語に注意)。

(54)a. 静かな山々に抱かれたまち、大屋町。 (深田 2001: 85)

b. 尾鷲湾を両手で抱いたように広がる人里を、背後から山並が包み込んでいる。

(熊野古道に関する紀行文から)

これらの言語表現は、次に示すように、客体の形状に関わる語句だけでなく主体の感覚に関わる語句とも共起可能である。

(55)a. 静かな山々にしっかりと / やさしく / あたたかく 抱かれたまち、大屋町。

b. 尾鷲湾をしっかりと / やさしく / あたたかく 両手で抱いたように広がる人里を、背後から山並が包み込んでいる。

b'. 尾鷲湾を両手で抱いたように広がる人里を、背後から山並が丸く / しっかりと / やさしく / あたたかく 包み込んでいる。

(55a) の「しっかりと」は、客体である「山々」の形状（山々が大屋町と隣接しているということ）を人間の「抱く」という行為との関連で擬人的に表している擬人化表現であり、「やさしく」は、その山々の性質（山々が大屋町あるいは大屋町に住んでいる人々に恵みをもたらす存在であること）を人間の性格との関連で擬人的に表している擬人化表現である。また、「あたたかく」は、もともと客体の状態だけでなく主体の感覚をも表すことができる感覚形容詞の連用形である。客体である「山々」自体の「あたたかい」状態を表しているとも、また、主体 — この場合の主体とは、一人称者である〈私〉を含む大屋町の住人 — がその山々から受ける「あたたかい」という心理的な感覚を表しているとも言える。

(55b) の「しっかりと」は、客体である「人里」の形状（人里と尾鷲湾とが隣接していること）を擬人的に表す擬人化表現であり、「やさしく」は、その人里に住む人々の思いを投影している転移修飾表現、「あたたかく」は、その人里 — 実際には、その人里に住む人たちと考えた方がいいかもしれない — の状態を表しているとも、また、その人里に入って感じた主体の感覚を表しているともとれる感覚形容詞の連用形である。

(55b') の「丸く」は、客体である「山並」の形状そのものを表す形容詞の連用形、「しっかりと」は、その山並の形状（山並が人里と隣接しているということ）を推測させる擬人化表現、「やさしく」は、その山並の状態を表す擬人化表現、「あたたかく」は、その本質的な意味として、客体の状態だけでなく、それを語る主体 — この場合、主体は、人里の住人に自らを投影していると考えられる — の感覚をも表すことができる感覚形容詞の連用形である。

このように、客体の形状を表す (54) の「抱かれた」「抱いた」「包み込んでいる」は、客体の形状そのものを表す「丸く」のような語句や客体の形状を推論させる「しっかりと」のような語句から主体の存在を強く感じさせる「やさしく」「あたたかく」のような語句に至るまでの様々な言語表現と共起できる。(54) が、他の日本語の主体移動表現同様、客体の形状を表しつつも、主体的な側面をも表すことのできる、主客未分な混沌とした意味世界を表す言語表現であることが分かる。これも日本語の主体指向性を表す例であると言える。

(54) の日本語に対応する英語の例を調べてみると、英語には、例えば、次のように、「しっかりと抱く」に相当する例は見られるのだが、「あたたかく抱く」「やさしく抱く」などに相当する例（例えば、*The road hugs the coastline {warmly/gently}*, あるいは *The road {warmly/gently} hugs the coastline* のような例）はない。

- (56) ... the road is very narrow, is strewn with potholes, and hugs the coastline (and cliffs) so tightly that you sometimes feel as if you're about to drive off the edge. (Fukada and Nozawa 2003)

先に見た日本語の「しっかりと」同様、この *tightly* は、客体の形状 ((56)においては、客体である「道」が海岸や崖に隣接しているということ) を人間の「抱く」という行為との関連で擬人的に表している言語表現である。英語では、このような語句しか、客体の形状を表す *hug* と共起できないということは、英語の主体移動表現やそれに準ずる言語表現は、やはり、主体の存在を感じさせるとはいえ、客体的側面を中心に表す言語表現だということになる。このことから、英語は客体指向の言語であると言えよう。

4.3. 情意を含意する様態動詞

興味深いことに、様態動詞の豊富な英語には、人ではない対象の様子を擬人的に表しながらも、その対象と密接に関わる人物の心情を暗示的に表している様態動詞の用法が見られる。次の例を見てみよう。

- (57) "Yeah! Says he wasn't hungry, or he jus'et. Give me the food. Now he's too weak. Can't hardly move." The pounding of the rain decreased to a soothing swish on the roof. The gaunt man moved his lips. Ma knelt beside him and put her ear close. His lips moved again. "Sure," Ma said. "You jus' be easy. He'll be awright. You jus' wai'll get them wet cl'es off'n my girl." (Wrath: 579)

- (58) For a minute Rose of Sharon sat still in the whispering barn. Then she hoisted her tired body up and drew the comfort about her. She moved slowly to the corner and stood looking down at the wasted face, into the wide, frightened eyes. Then slowly she lay down beside him. He shook his head slowly from side to side. Rose of Sharon loosened one side of the blanket and bared her breast. "You got to," she said. She squirmed closed and pulled his head close. "There!" she said. "There." (Wrath: 580-81)

下線を引いた語句 *soothing*, *whispering* は様態動詞から派生した形容詞である。これらは雨や納屋の様子を表すために用いられているのだが、(57) においては3行目の *You jus' be easy*、(58) においては4行目の *"You got to," she said* や5行目の *"There!" she said. "There."* から、これらが、単に雨や納屋の様子を表しているのではなく、それらと密接に関連する人物 ((57) においては Ma, (58) においては Rose of Sharon) の心情をも表していると分かる。様態動詞を多用する英語ならではの創造的な様態動詞の用法である。

5. 終わりに

Slobin らの研究は、英語は様態動詞が豊富でそれに様々な経路表現をつけ加えるだけでコンパクトにダイナミックな事態を表現できるのに対し、日本語は様態動詞が少なく、それを補うのに、複合動詞や擬音語、擬態語をはじめとする副詞句を駆使して表そうとする、というような英語と日本語の違いを明らかにしている。しかし、彼らの研究は、私たちが体験する意味世界の中の、主に、客体の行為に関わるダイナミックな側面がそれぞれの言語でどのように重ね合わせられているのかに注目したものであって、それ以外の意味の側面に関する具体的な考察はない。

本稿では、Slobin が注目してこなかった意味の側面、すなわち、主体に関わるスタティックな側面に焦点を当て、その重ね合わせの仕方や程度に英語と日本語とで何らかの違いが見られるのかを、主体の判断の形式を直接表していると考えられる、そして、その意味で、私たちの体験する意味世界の中の客体的側面だ

けでなく主体的側面とも密接に関わっていると考えられる形容詞(文)を中心に考察してきた。

2節では、形容詞(文)に関する先行研究をまとめ、そこから、英語と日本語の形容詞においてはその意味するところに違いが見られることを指摘した。その違いとは、英語の形容詞においては、主体的意味を表すのか客体的意味を表すのかが語彙的に明確に区別される傾向があるのに対し、日本語の形容詞においては、情意形容詞をはじめとして、主客未分な意味世界を表す傾向があるということであった。

3節では、形容詞の拡張的な用法の1つである転移修飾を取り上げた。転移修飾が、日本語では日常的に広く見られる一般的な用法であるのに対し、英語ではどちらかという特異な用法であることを明らかにした上で、この違いが2節で主張した両言語の形容詞の意味における違いに起因していることを述べた。また、英語においては、主体の情意を表す語句が客体を修飾対象としてとった場合に、転移修飾表現としてではなく、その客体の状態を表す擬人化表現として、あるいは、主体の情意から推論される客体の状態や性質を表す言語表現として解釈されることが多いのに対し、日本語においては、文脈に応じて、転移修飾表現とも擬人化表現とも、また、客体の状態や性質を表す言語表現とも解釈される、という違いがあることを指摘し、そこから、英語の形容詞においては、語彙の違いだけでなく、それが何を修飾するかという用法の違いによっても、主体的意味を表すのか客体的意味を表すのか明確に区別される傾向があるということを示した。

4節では、主体移動表現やそれに準ずる言語表現を取り上げ、これが、形容詞文同様、主体の判断の形式を直接表したものであることを述べるとともに、英語においては、これらの言語表現が、動詞との関連の中で客体の形状を推測させるような主体の移動の様態を表す語句としか共起できないのに対し、日本語においては、そのような語句だけでなく、客体の形状を推測させる擬人化表現や、主体だけでなく客体(〈事柄〉やその〈事柄〉の中核となる〈もの〉)をも修飾対象としてとれる主体の情意を表す言語表現とも共起可能であるということを示し、英語においては、主体の存在を強く感じさせる主体移動表現やそれに準ずる言語表現においてさえ、やはり、その意味の中心となっているのは客体の形状に関わる客観的側面であり、日本語の主体移動表現やそれに準ずる言語表現においては、客体の形状を表しつつも、やはり、その意味の中心にあるのは主体に関わる主体的・主観的側面である、ということを示した。また、以上のような主体移動表現とそれに準ずる言語表現に見られる英語と日本語の違いを、Slobinらの研究や本稿の2節、3節における考察と絡めて解釈することで、英語は、私たちの体験する意味世界の中の客体に関わる側面をことばに重ね合わせる傾向がある客体志向の言語であるのに対し、日本語は、私たちの体験する意味世界の中の主体に関わる側面をことばに重ね合わせる傾向がある主体志向の言語である、ということを示した。

今後は、本稿で十分考察できなかった、*happy*と*sad*の違い(cf.2.3)や、対象の状態を表す形容詞の主体化(cf.3.4)、あるいは、主体の情意を表すような状態動詞の擬人化用法(cf.4.3)などの分析も進めながら、動詞や形容詞の1つ1つの用法に重ね合わせられている意味世界がどのようなものであるか、また、その1つ1つの用法はどのような認知プロセスを介して発達してきたもので、その発達に、英語と日本語とで何らかの違いが見られるのかといった問題について考察していきたい。さらに、本稿で扱いきれなかった現象の中には、主体の情意を対象に投影していると考えられるX of Yという形式—Xは対象、Yは主体の情意を表す。*this mansion of gloom* (Usher: 274), *an atmosphere of sorrow* (Usher: 278), *some days of bitter grief* (Usher: 289)などがその例である—もあるのだが、それについても今後分析していきたいと思っている。

形容詞文や主体移動表現と同じように主体の判断の形式に直接対応していると考えられる言語表現の中には、「山がある」のような存在文(cf.川端(1958:6-7))や、*appear*や「現れる」などの出現動詞を用いた文(cf.深田(2004))がある。また、存在文と同様、「ものが在ること」それ自体を表す文としては、「見える」「聞こえる」などの動詞を用いた文や「多い」「少ない」という形容詞を用いた文がある(cf.尾上(1985:

34-35)。今後はこのような言語表現にも視野を広げ、主客未分な意味世界がそれぞれの言語表現の意味や用法の中でどのような認知プロセスを経てどのように分化してきているのかを考察しながら、ことばの意味とその背後にある主体の認知との関係を包括的に捉えていきたい。

注

* 本稿での議論を展開していくにあたり、大沼雅彦先生、山梨正明先生、他多くの方々から貴重なご意見を数多くいただいた。ここに記して感謝したい。

¹ Johnson (1987) は、次に示すように、意味を理解の問題として捉えている。

... meaning is always a matter of human understanding, which constitutes our experience of a common world that we can make some sense of. (Johnson 1987: 177)

理解には、私たちの持つ様々な能力（例えば、知覚、運動感覚に関わる能力など）が関与してくる。言い換えれば、そのような能力があるからこそ、私たちは、なんらかの意味を（人として同じように）経験の中に見いだすことができるとも言える。

² 私がこのような見解を持つに至ったのは、西光義弘先生、松本曜先生、早瀬尚子氏、谷口一美氏、ブラシヤント・パルデシ氏との議論のおかげである。

³ 尾上 (1985) も指摘しているように、川端は、(2b) のような文を、体制としては2つの句 — (2b) においては、「逢うことがうれしい」という句と「私はうれしい」という句の2つ — を含む複文であると考えている (cf. 尾上 (1985: 36))。

⁴ 感覚形容詞は、その感覚の種類によって、感覚の原因、感覚の生じた場所としての身体、感覚の生じた場所の状態のどれを「○○が」の形で表せるかが異なるという点でも興味深い。(7) の「痛い」の場合には、この3つのすべてが「○○が」の形で表される — 「棘」は感覚の原因、「指」は感覚の生じた場所としての身体、「傷」は感覚の生じた場所の状態である — が、「甘い」の場合には、次に示すように、感覚の原因しか表すことができない。

(i) {りんごが/*舌が/*?}甘い。

⁵ *melancholy* は、その語源であるギリシャ語にさかのぼると、「黒胆汁がある状態」という身体的状態を表す言語表現であったことが分かる (cf. 『ランダムハウス英和大辞典』(第2版): *melancholy*)。しかし、英語に入ってきた時点で、すでに、「憂鬱な」という身体的状態とも心理的状态ともとれるような意味を表すようになっていたようである (cf. *OED: melancholy*)。

⁶ この例外となるのは、おそらく、篠原 (2002) が TYPE 6 に分類した *sad* のような形容詞であろう。

⁷ Kövecses (2002) は、このメタファーを INANIMATE OBJECTS ARE PEOPLE と呼んでいる (cf. Kövecses (2002: 58))。

引用文出典

Edgar Allan Poe. 1839. *The Fall of the House of Usher*. [James A. Harrison (ed.) 1965. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Vol. III. New York: AMS Press.] (谷崎精二 (訳)、1969、『エドガア・アラン・ポオ全集』第2巻、東京：春秋社)

John Steinbeck. 1976. *The Grapes of Wrath*. London: Penguin Book. [First published in 1939 by the Viking Press in New York] (大橋健三郎 (訳)、1961、『怒りのぶどう』、東京：岩波書店)

参考文献

- 尼ヶ崎彬. 1990. 『ことばと身体』. 東京: 勁草書房.
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- 深田智. 2001. 「“Subjectification”とは何か: 言語表現の意味の根源を探る」. 『言語科学論集』(京都大学) 7, 61-89.
- 深田智. 2004. “Perception of Appearance in English and Japanese.” 日本認知言語学会第5回記念大会口頭発表. 関西大学.
- Fukada, Chie, and Hajime Nozawa. 2003. “Rethinking Subjectification.” Paper presented at ICLC 8, Rioja, Spain.
- Goossens, Louis. 1990. “Metaphonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Expressions for Linguistic Action.” *Cognitive Linguistics* 1 (3), 323-340.
- 本多啓. 2002. 「英語中間構文とその周辺: 生態心理学の観点から」. 西村義樹(編)『認知言語学Ⅰ: 事象構造』. 東京: 東京大学出版会, 11-36.
- 本多啓. 2003. 「共同注意の統語論」. 山梨正明(編)『認知言語学論考Ⅱ』. 東京: ひつじ書房, 199-229.
- 井出祥子. 2004. 『言うという行為』の成り立ち: 文法とコミュニケーションを繋ぐもの」. 関西言語学会講演. 京都外国語大学.
- 岩田純一. 1988. 『「比喩ル」の心: 比喩の発達の観点から』. 山梨正明(著)『比喩と理解』(補稿). 東京: 東京大学出版会, 161-180.
- Johnson, Christopher. 1999. “Metaphor vs. Conflation in the Acquisition of Polysemy: The Case of *See*.” In: Masako Hiraga, Chris Sinha, and Sherman Wilcox (eds.) *Cultural, Typological, Psychological Issues in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 155-169.
- 川端善明. 1958. 「形容詞文」『国語国文』27(12), 1-11.
- 川端善明. 1979. 『活用の研究』Ⅱ. 東京: 大修館書店.
- 川端善明. 1983. 「文の構造と種類: 形容詞文」『日本語学』2(5), 128-134.
- 川端善明. 1993-1995. 「川端善明講義ノート(1993-1995)」. (深田による講義メモ).
- Kövecses, Zoltán. 2002. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988a. “An Overview of Cognitive Grammar.” In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 3-48.
- Langacker, Ronald W. 1988b. “A View of Linguistic Semantics.” In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 49-90.
- Langacker, Ronald W. 1990. “Subjectification.” *Cognitive Linguistics* 1 (1), 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1998. “On Subjectification and Grammaticization.” In: Jean-Pierre Koenig (ed.), *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*. Stanford, Calif.: CSLI Publications, 71-89.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Matsumoto, Yo. 1996. “How Abstract is Subjective Motion?: A Comparison of Access Path Expressions and Coverage Path Expressions.” In: Adele E. Goldberg (ed.), *Conceptual Structure, Discourse, and Language*. Stanford, Calif.: CSLI publications, 359-373.

- 仲本康一郎. 2001. "Levels of Subjectivity." 日本英語学会第19回大会ワークショップ『主体化と意味拡張のダイナミズム:ユニフィケーションに向けて』口頭発表. 東京大学.
- Nisbett, Richard E. 2003. *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently and Why*. New York: Free Press.
- 尾上圭介. 1985. 「主語・主格・主題」. 『日本語学』4(10), 30-38.
- 尾上圭介. 1997. 「認知言語学と国語学の対話:モダリティ、主語をめぐって」. 第6回CLC言語学集中講義 園田女子学園
- 尾上圭介. 2001. 『文法と意味』I. 東京:くろしお出版
- 篠原俊吾. 2002. 「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか:形容詞文の事態把握とその中核をめぐって」. 西村義樹(編)『認知言語学I:事象構造』. 東京:東京大学出版会, 261-284.
- Slobin, Dan I. 2003. "Language and Thought Online: Cognitive Consequences of Linguistic Relativity." In: Dedre Gentner and Susan Goldin-Meadow (eds.), *Language and Mind: Advances in the Study of Language and Thought*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 157-191.
- Slobin, Dan I. 2004. "The Many Ways to Search for a Frog: Linguistic Typology and the Expression of Motion Events." In: Sven Strömquist and Ludo Verhoeven (eds.), *Relating Events in Narrative: Typological and Contextual Perspectives*. Mahwah, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates, 219-257.
- Sugiyama, Yukiko. 2000. "Expressing Manner in the Japanese Translation of *The Hobbit*. A Preliminary Study of Comparison between Japanese and English Stories." Unpublished paper, LIN 636 Seminar on Space, Time, and Force. SUNY Buffalo.
- Talmy, Leonard. 1996. "Fictive Motion in Language and 'Ception'." In: Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett (eds.), *Language and Space*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 211-276.
- 時枝誠記. 1941. 『国語学原論』. 東京:岩波書店.
- 時枝誠記. 1973. 「語の意味の体系的組織は可能であるか:此の問題の由来とその解決に必要な準備的調査」. 時枝誠記(著)『言語本質論』. 東京:岩波書店, 205-253.
- Werner, Heinz, and Bernard Kaplan. 1963. *Symbol Formation: An Organismic-Developmental Approach to Language and the Expression of Thought*. New York: John Wiley.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』. 東京:東京大学出版会.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』. 東京:ひつじ書房.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』. 東京:開拓社